

閑人閑話

KANJIN KANWA

伊藤礼

第一話 年年歳歳花相似(上)

二〇一一年の春、日本のひとびとは自粛が必要ではないだろうかと考えた。百年か千年に一度という大災害が起こって、世の中が変わったからである。罹災者が続出し、そのひとびとの不幸せを思えば浮かれていられない、という思いが日本人の心に自粛という言葉を生み出したのである。その自粛というのは具体的にどういうことかというところ、まず第一に社会問題となつたのは、間もなく始まる予定のプロ野球のことだった。この開幕は遅らせるのが時節柄本当じゃないか、という意見が出たのである。

ところが、異変から一週間ぐらいたつと、いやそうではないのではないか。自粛ばかりしては世の中

そうなってくると、今度は花見が世の中の論争の対象として浮上ることになってきたのも当然だった。花見に行つて良いのか、良くないのか。どちらが正しいのか、と世人は迷い始めたのであった。

この論争には、簡単には結論が見出されなかった。それで、現実問題として世人はどちらに軍配を挙げているのか、実地に検証してみたい、という気分になってきたのであった。

しかし、わたくしは加齢のために動きがのろい。脳味噌が考えることを実際の身体の動きに結びつけるのがなかなかなのであるが、そのなかなかを押して腰をあげたのが、四月十日という日であった。問題は桜の花であるから、ぐずぐずしているとどんどん咲いてしまい、やがて嵐が来て散ってしまう。そうなること花見の問題は雲散霧消してしまう。わたくしはこうしては行かないという気分には追い詰められたのである。

ついでに出かけることにしたのは四月の十日という日で、これはだいたいにおいて毎年の東京の桜満開の日だった。加えて天気は穏やかであったし、日曜日でもあったから、検分には適当と言って良い日だった。

出かけることにした、といま述べたが、出かける

が沈滞するばかりだ。いまこそ大いに楽しみ、お金を使う。どんどんやる。そのほうが本当は正しいのだ、というふうにもまた日本人の心は変わってきたのであった。

どちらが正しいのか解答が見出せないまま日にちはたつていった。そして、日本人がそういう論争をしている間にも季節は移ろい、人間世界の大悲劇とかかわりなく昨年一昨年一昨年と変わらぬ桜花の開花を見るに至つたのであった。

年年歳歳花相似

してもその前にどこに出かけるかを決める必要があった。これはじつは難しい問題だった。花見の場所はたくさんあるからであり、その全部を回るとは至難の業であるからである。古いところから言うと、小金井堤、飛鳥山、向島、上野など。新しくは、目黒川、井の頭公園、和田堀公園、新宿御苑、千鳥ヶ淵、靖国神社、乞田川、石神井川、新井薬師、浜離宮。その他小振りなところたくさん。

あそこか、ここか。いろいろ考えたが、あそこもここも、というわけにはいかない。挙句、狙いをひとつに絞ることにした。決めたのは向島だった。桜の季節であるから、花とともに長命寺の桜餅を狙うこともできるからであった。王子の玉子焼きも考えたが、桜の季節だから長命寺を本命とするのが正しいことだった。乗る自転車は車輪の太いマウンテンバイクにした。マウンテンバイクだとスピードを出す気分にならない。安定性と乗り心地を考えても、花見という行事にふさわしい。年寄りの気分には合う自転車だったからである。

目的地と自転車が決まると、あとは経路である。寓居の所在、杉並から向島に行くには、普通は甲州街道